

群 教 セ	H01 - 01
	平 27. 257 集
	幼児教育

# 好奇心や探究心を育む環境の構成の工夫

——友達と園庭にある自然物との関わりを通して——

特別研修員 西川 明美

## I 研究テーマ設定の理由

幼児は、周囲の様々な環境に好奇心や探究心を持って関わり、自分の生活や遊びに取り入れ、楽しんだり、感動したりするなどして様々な感覚を豊かにしていく。そのために、園生活の中で教師や友達などの人々、物、自然現象など、自分の周りの様々な環境と関わりを深められるよう、魅力ある環境を意図的、計画的に構成し援助することが必要である。

幼児にとって身近な環境の中でも、特に自然との触れ合いは、驚いたり、不思議がったり、何かに気付いたり発見したりするなど、大きな意味を持っている。また、幼児が同じ環境の下で、一緒に活動したとしても、興味・関心、発想の仕方や考え方などは、一人一人異なる。

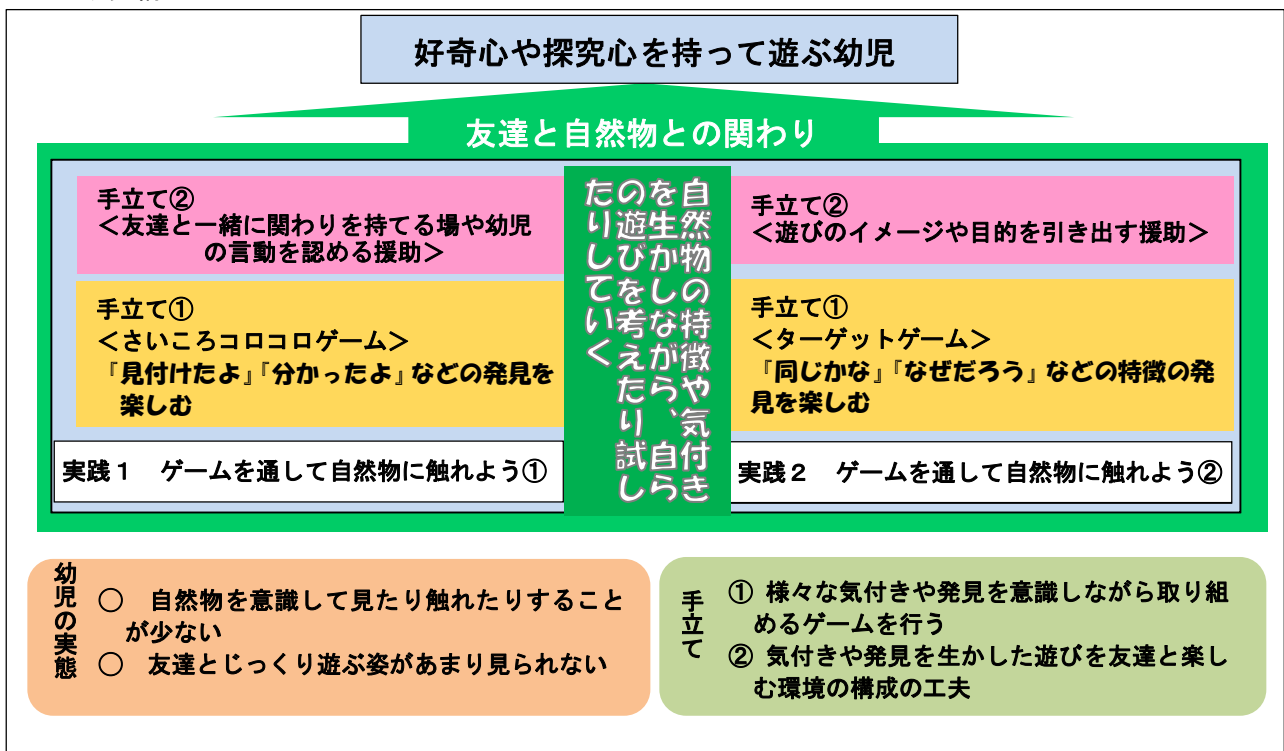
近年、幼児を取り巻く環境は著しく変化し、特に自然環境との関わりが希薄になってきている。また、自然環境そのものも減少しているため、身近にあってもそれを意識して取り入れなければ、そのよさを発揮することはできない。

本園の実態を見てみると、自然物に興味を持ち、意識して見たり触れたりしながら、様々な感覚を体験したり、自然の事象に自分から進んで関わったりする幼児が少ない。また、何かに興味を持って関わっても、その中で発見を楽しみ、考えたり試したり、友達と共感したりしながらじっくり遊ぶ姿があまり見られないなど、好奇心や探究心が薄い幼児が多いのが現状である。

そこで、友達と身近な自然環境を生かし、好奇心や探究心を育むには、幼児自身が身近な自然物に興味・関心を持ち、自分なりに試したり確かめたりして、物の特性や物事の法則性に気付くような環境の構成をするとともに、友達と一緒に活動する中で自分とは異なる考えに接したり、友達の考えに刺激を受けたりして、知恵を出し合いながら、じっくり取り組めるような環境を構成する必要があると考え、本テーマを設定した。

## II 研究内容

### 1 研究構想図



## 2 保育改善に向けた手立て

幼児が自然物に対して興味・関心を持ったり、感触や感覚などの気付きや発見に共感したりしたことを生かし、自らの遊びに取り入れるきっかけとなるようなゲームをクラスで行う。そして、ゲームを通して芽生えた自然物に対しての興味・関心や、気付いた感触や感覚を生かしたり、友達の考えに刺激を受けたりしながら、幼児が遊びを楽しめるよう、次のような実践を行った。

＜実践1「ゲームを通して自然物に触れよう①」における研究上の手立て＞

①園庭にある身近な自然物に興味を持つきっかけとなるように、さいころコロコロゲームを行う。

○ さいころコロコロゲームとは

さいころの各面に五感を通して探すための言葉を書いたり自然物を貼ったりしておき、出た面の内容をみんなで探したり、何を見つけたか見せ合ったりするゲーム。

②幼児がゲームを通して感じた自然物の特徴や気付きを教師が認めたり、自然物を生かした遊びを友達と共有し関わり合える場の設定を工夫したりする。

実践1を通し、幼児がより自然物に興味を持つ様子が見られ、日々の保育の中でも「アサガオの蔓が伸びたよ」や「小さい花が咲いたよ」という言葉を自然と発したり、栽培している野菜の生長を友達と毎日観察したりするなど、自ら自然と関わる姿が見られるようになった。また、小枝を使って迷路を考えたり、草花でごちそうや色水を作りレストランごっこで遊んだりするなど、自然物への興味・関心を持ち、自らの遊びに取り入れる姿も多く見られた。そこで、友達と一緒にいろいろな遊びにじっくりと取り組み、幼児に芽生えた自然物への興味・関心を継続させ、自分とは異なる考えに接したり、友達の考えに刺激を受けたりして、知恵を出し合いながら、好奇心や探究心を育むために次のような実践を行った。

＜実践2「ゲームを通して自然物に触れよう②」における研究上の手立て＞

①園庭にある身近な自然物に興味を持ったり、自然物の変化や特徴に気付いたりするきっかけとなるように、ターゲットゲームを行う。

○ ターゲットゲームとは

おはじきを的当てから少し離れた場所から投げ、止まった場所の指示に従って、見付けたり、探したりするゲーム。その際、生長による変化に気付くきっかけとなるように、写真と実物との比較ができた、実際に触ったり、採ったりすることができるように環境を構成する。

②ゲームで感じた自然物の生長や季節の変化などへの気付きを教師が認めたり、友達と自然物を生かした遊びのイメージや目的を引き出す言葉掛けを工夫したりする。

## Ⅲ 研究のまとめ

### 1 成果

- 幼児の実態に合わせ、自然環境に深く関わり、興味・関心を持つために行ったゲームは、幼児一人一人が様々な自然物に対する新たな気付きや発見を生み出すことにつながった。そして、その興味・関心や新たな気付きや発見を生かせるような環境の構成を工夫することで、自分とは異なる考えに接したり、友達の考えに刺激を受けたりして、知恵を出し合いながら、友達とじっくり遊びに取り組むことができた。
- 幼児が意識して自然物を見たり触れたりしながら感覚や感触を体験したことで、様々な思いを巡らせ、自らの遊びを考えたり試したりしながら自然物に興味を持って関わり、好奇心や探究心を高めながら遊びを進めていくことが分かった。

### 2 課題

- 幼児が自ら身近な自然環境に働きかけ、様々な活動を生み出していけるよう、じっくり関われる時間や場などを確保する必要がある。その際、園庭などの環境や季節、発達段階などを考慮し、年間を見通した計画が重要である。
- 幼児が好奇心や探究心を持ちながら、主体的に遊びを進めていけるように、気付きや発見を友達と共感し合うとともに、思いや考えをお互いに交流できるような環境の構成を工夫する必要がある。

## <保育実践>

### 実践 1

#### 1 単元名 「ゲームを通して自然物に触れよう①」 (幼稚園 5 歳児・6 月)

#### 2 本単元及び本時について

さいころの各面に五感を通して探すための言葉を書いたり自然物を貼ったりしておき、出た面の内容をみんなで探したり、何を見つけたか見せ合ったりする「さいころコロコロゲーム」をクラスで行う。このゲームを通して、自然物に対して興味・関心を持ったり、感触や感覚などの気付きや発見に共感したりして、身近な自然物と関わるきっかけとする。そして、ゲームを通して芽生えた自然物への興味・関心や、気付きや発見を自らの遊びに取り入れ、友達の考えに刺激を受けたりしながら、幼児が遊びを楽しめるように環境の構成を工夫することで、好奇心や探究心を持った幼児の育成へとつながるであろうと考える。

#### 3 保育の実際

##### 手立て① さいころコロコロゲーム

##### (前日までの環境の構成)

- 前日に自然物にはどんな物があるのか、幼稚園にはどんな物があるのか話し合ったり予想したりした。
- 本実践で設定した具体的なさいころの目は「ピンクの花」「ギザギザの葉っぱ」「ツルツルの葉っぱ」「紫色の花」「竹の葉」「細長い葉っぱ」「丸い葉っぱ」である。これらの選定に当たっては、教師が園にある気付かせたい自然物に加え、話し合いの中で幼児から出された、知っている物や見付けたい物など、幼児の思いや実態も考慮した。(図1)

##### (幼児の姿)

ほとんどの幼児は、自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりしながら、物を探ることやみんなで遊ぶことの楽しさを感じながら参加していた。特に、前日までの遊びの流れを受けて、自分の出したい目が決まっていた幼児は、「あーっ、〇〇なら分かるのになあ」や「〇〇が出るまでやめないよ」など自分の知っていることや伝えたい自然物の特徴などを、友達に伝えたがっている様子が見られた。また、見付けに行った先では、自分の知らなかった自然物の姿を発見して驚いたり、喜んだりする様子が見られた。

このように、幼児はゲームをきっかけとして身近な自然物に対して興味・関心を持つことができていた。特に幼児が強く興味・関心を示した『ギザギザの葉っぱ』の目が出た時の具体的な姿は、以下のとおりである。

##### (「ギザギザの葉っぱ」を探す場面)

3回目が出た目である「ギザギサの葉っぱ」を探す場面において、A児は自分の立っている場所の近くを見渡し、すぐ視線に入ったタンポポの葉のギザギザの部分だけを取り、それを教師に見せた。「よく見付けたね。ここがギザギザだよ」と共感されると「やったー」と喜んでいた。その後、6回目にまた「ギザギサの葉っぱ」が出ると、今度は遠くに視線をやった後、突然走り出し「こっちにあるよ」と園庭南奥にある、あまり人目に付かない、柵の木に行った。A児が「これ、とっても痛いんだよ」と葉っぱを取り、自分の腕に刺すと「痛っ」「やっぱり、ちょっと触っただけでも痛いね」と顔を歪めてつぶやいた。「そっとするからね」と言いながらK児の腕にも刺すと、K児は思わず「痛っ」と声を上げる。A児が「だって、



図1 さいころコロコロゲームのさいころ



図2 ギザギザの葉っぱを探す場面

よく見て、ここが尖っているもん」と葉っぱの周りにいた友達に見せると、次々にギザギザの葉っぱに興味を持ち「ほんとだ」「触らせて」など実際に触り、ギザギザの感触を味わっていた。(図2)

このように、幼児は、さいころコロコログेमをきっかけとして、自然物に対して興味を持つと同時に、自然物の変化や特徴、不思議さやおもしろさに気付く姿が見られた。

その後、自分たちの見付けた自然物を使った遊びなど、思い思いの遊びへと興味が移っていった。その中で自然物への興味・関心や、気付きや発見を生かしながら、自らの遊びを考えたり試したりしていく中で、友達と関わりを持ち、自分とは異なる考えに接したり、友達の考えに刺激を受けたりしながら、幼児が遊びを楽しめるように次のような環境を設定した。

## 手立て② 友達と一緒に関わりを持てる場や幼児の言動を認める援助

### (教師の環境の構成)

- ゲームで集めた草や葉っぱ、竹の葉などは箱に入れておき、幼児の目に付くよう置いておく。
- 画用紙やセロハンテープ、カラーフェルトペンなども使えるようにしておく。
- 幼児が遊び方をイメージする際の一助となるよう、教師がカエデの葉っぱを画用紙に貼り付けるなど、幼児と一緒に遊ぶ。
- 自然物の特徴や気付きを生かし、自らの遊びを考えたり試したりしていく中で、想像力や発想力を引き出す言葉掛けの工夫や場の設定の工夫を行う。

### (幼児の姿)

多くの幼児が、画用紙に自然物を貼り付けて遊ぶ「貼り絵遊び」に没頭し始めた。他にも自然物を使った「ままごと遊び」や「形合わせ遊び」をしていた。その後、「貼り絵遊び」に飽きた幼児が数人出始め、枯れた竹の葉とセロハンテープを使って遊び始めた。さいころコロコログेमで見付けてきた実物を手に取り、試したり、工夫したりしながら遊んでいる際に、「それ、他に何かに使えないかな」の教師の言葉掛けをきっかけにして「ひげじいさん遊び」へと変化した。『ひげじいさん遊びの場面』は以下のとおりである。

### (「ひげじいさん」遊びの場面)

G児が、葉っぱを手に取り画用紙の上で、いろいろに向きを変え「何になるかな」「こうするとロボットかな」などと自分で考えたり、イメージしたりしながら、草や葉っぱを貼り付けたり、カラーフェルトペンで手や顔や線などを描き真剣な表情で作品作りをしていた。

F児は画用紙に貼り付けるのではなく、竹の葉を組み合わせTの字や剣を作ったりして、立体的な作品を作り教師に見せていた。「本物みたいだね」「それを使って、他の遊びが楽しめそうだよ」など褒めたり、認めたりした。いろいろと組み合わせているうちに「いいことを思いついた」とつぶやき、竹の葉をセロハンテープで自分の眉毛に貼り付け「みんな見て、おじいさん」と言いながら、みんなに見せていた。その後も、顎に何本か付けたり、歩く時に腰をかがめたりしながら「ひげじいさん」と言いながら友達のをウロウロしていた。その様子を見ていた友達もまねをして、顔に貼り付け一緒に楽しんでいた。(図3)



図3 ひげじいさん遊びの様子

## 4 考察

- ゲームをきっかけとして、意識的に草花や葉っぱなど自然物を見たり触れたりすることで、形や色、感触などを体感し、特徴や不思議さに気付くことができた。
- 幼児が熱中する自然物に関するゲームを、クラスの活動として取り入れることで、自然物に対する興味・関心が高まるとともに、自然物を取り入れた遊びへとつながるなど、自然物に対する意識が継続した。
- 幼児の言動を認める言葉掛けをすることで、想像力や発想力が引き出され、好奇心・探究心を持って遊びを楽しむことができた。



## 実践 2

### 1 単元名 「ゲームを通して自然物に触れよう②」

(幼稚園 5 歳児・11 月)

### 2 本単元及び本時について

園庭など身近な所にある自然物に興味を持ったり、自然物の変化や特徴に気付いたりするきっかけとなるように、おはじきを的当てから少し離れた場所から投げ、止まった場所の指示に従って、見付けたり、探したりするターゲットゲームを行う。その後、ゲームを通して芽生えた自然物に関する興味・関心、自然物の生長、季節の変化への気づきを自らの遊びに取り入れ、確かめたり試したりしていく中で、自然物の特性や物事の法則性を生かしながら友達との遊びを充実させる環境の構成を工夫することで、好奇心や探究心を持った幼児の育成へとつながるであろうと考える。

### 3 保育の実際

#### 手立て① ターゲットゲーム

##### (前日までの環境の構成)

- 円形に放射状の線を入れた的当てや枠に置く園庭にある自然物の写真を用意しておいた。本実践で使用した写真は「ほうれん草」「白菜」「菊の花」「フウセンカズラ」「カエデ」「センダンの葉」「藤の葉」などである。これらは、園内にあるもので、幼児が日々、目にしている自然物である。しかし、意識して生長の変化に気付いたり、遊びに取り入れたりしての関わりは少ないため、改めて、自然物の変化や特徴に気付けるよう考慮した。(図4)
- ゲームと同じ写真を幼児の目に付く場所に置いた。

##### (幼児の姿)

2～3人のグループになり、楽しそうに協力してゲームを進めていた。的にあった写真を実際に持って探しに行く幼児が多く、実物と写真を見比べて、同じ物なのか、違う物なのかを話し合っていた。「この葉っぱの形が少し違うから、これじゃないよ」「色がこんなに濃くないから違うんじゃない」など、植物の特徴に着目しながら相談して判断している姿が目立った。写真撮影時と比べて生長している植物もあり、予想したり新たな発見を楽しんだりしながら探していた。また、目的物を探している最中に、自分が興味ある物や、おもしろそうな物を見付けると、得意げに大きな声で教師や友達に知らせている姿も多く見られた。



図4 ターゲットゲームの的

幼児は、ターゲットゲームに夢中になりながらも、自然物に興味を持ったり、自然物の変化や特徴に気付いたりするきっかけとしていた。特に顕著だった『菊の花を探しながら朴の木の葉を見つけた場面』と『フウセンカズラの実の色と種の色に気付いた場面』の幼児の具体的な姿は、以下のとおりである。

##### (菊の花を探しながら朴の木の葉を見つけた場面)

D児が菊を見付けにいった際に、枯れて乾いた朴の木の葉っぱを見つけた。自分の顔よりも大きな葉っぱを手に取り「すごい、こんなに大きい葉っぱ」と驚き、周りにいる友達に「ねえ見て」と声を掛け、手に持っている葉っぱを見せたり、うちわにして扇いだりしていた。その後はゲームの目的であった菊の花を探しに走って行った。

##### (フウセンカズラの実の色と種の色に気付いた場面)

F児はフウセンカズラを探しに行き、見付けて手に取り、実を破って遊び始めた。すると、「大発見だぁ」と大きな声を上げ、自分の気づきを誰かに伝えたい様子だった。教師が近づくとフウセンカズラの実の色と種の色について『緑色の実は種も緑、茶色の実は種も茶色である』と気付いたことを嬉しそうに話した。その後、集まってきた友達にも自分の気づきを得意そうに伝えていた。

このように、幼児はターゲットゲームをきっかけとして、自然物に対して興味・関心を持った。同時に自然物の変化や特徴、おもしろさに気付くきっかけにもなった。その後、自分たちの見つけた自然物

を使ったケーキ作りやバーベキューごっこ、パリパリ温泉作りなど、思い思いの遊びへと興味が移っていった。その際、自然の生長、季節の変化などへの気付きを自然物の特性や物事の法則性に生かしながら、遊びのイメージや目的を共有し友達との遊びを充実させるように次のような環境の設定を行った。

## 手立て② 遊びのイメージや目的を引き出す援助

### (教師の環境の構成)

- 前日、F児とJ児は、手で握るとパリパリと音がする落ち葉を見付け、音や感触を楽しみながら、パリパリする葉っぱ探しを楽しんでいたことを受け、タライに落ち葉を山盛りに入れておいた。
- 事前に採取した、センニチコウや向日葵の種、数珠玉などの自然物や、様々な大きさや形に切った段ボール片、モール、木工ボンドなど用意し、お菓子作りやアクセサリー作りなどの製作を楽しめる環境を設定した。
- 自然の生長、季節の変化などへの気付きを生かし、自らの遊びを考えたり試したりしていく中で、遊びのイメージや目的を引き出す言葉掛けの工夫や遊びの発想にあったスペースの確保をした。

### (幼児の姿)

多くの幼児が、ターゲットゲームで関わった自然物を使った遊びに没頭し始めた。木の実や葉っぱをボンドで付けて遊ぶ『ケーキ作り』やフウセンカズラから種を取り出し炒めて遊ぶ「バーベキューごっこ」などで遊ぶ幼児が多かった。この『バーベキューごっこ』では、ターゲットゲームで発見した『フウセンカズラの実の色と種の色への気付き』を意識して遊ぶ姿が見られた。また、山盛りの落ち葉の入ったタライに気付き、そこからイメージを持って遊びを考え『パリパリ温泉作り』遊びに熱中する幼児もいた。『パリパリ温泉作り』遊びの場面は以下のとおりである。

### (「パリパリ温泉作り」遊びの場面)

F児がタライの前で「何か遊びにならないか」と思案しているところに、前日の遊びの流れを受けて教師が「葉っぱが温泉だったらいいのにな」と言葉を掛けた。すると、「無理だよ」と最初は躊躇したが、タライに入った落ち葉を手で握り、パリパリと言いながら細かくし始めた。「手じゃなくて、おしりですべてやってみよう」と、タライに座ってみると「これ温泉になる！



図5 パリパリ温泉作りの様子

パリパリ温泉だ」と大声で叫んだ。F児の声に反応し、数人の男児が集まり、入る順番を決めたり、みんなで一緒に入ったりして温泉を楽しんでいた。しかし、タライの中の葉っぱが粉々になり、少なくなったことで、3人でパリパリの葉っぱ探しを始めた。手で握った時にパリパリとしなくてはいけないため、一枚一枚葉っぱを拾いながら「これは大きいけど、まだグニャグニャだからだめ」「これも、まだかな」など試行錯誤しながら拾っていた。F児とJ児は、前日の経験から、どんな葉っぱを見付ければよいか分かっていたが、D児は、初めてで理解していないため、上手くパリパリの葉っぱを探せないでいた。そこで教師が、思いついたように「そういえば、Dくんゲームの時に大きな葉っぱを見付けなかった？」と伝えると、D児もハッと思い出し、F児とJ児と共に嬉しそうに一目散に走り出し、木の木の葉を段ボール一杯に拾い、満足そうに葉っぱをタライに入れていた。

タライに葉っぱが増えると、多くの幼児が「パリパリ温泉」「気持ちいい」と言いながらおしりや足を入れて楽しんでいった。(図5)

## 4 考察

- 友達とゲームを楽しみながら園庭の自然物にじっくり目を向け、触れることで、新たな特徴を発見し、興味が高まり、より探ってみようとする意欲が高まった。
- 幼児がゲームを通して得た自然物の生長、季節の変化への気付きを生かし、遊びのイメージや目的を共有することで、好奇心や探究心を持って遊びを楽しむことができた。